随想

阿蘇の地下水

安浪　栄基

経済同友会が、熊本県の産業開発についていまとり上げている問題の一つに、阿蘇地方の開発がある。

外輪の山並みに囲まれた広大な地域の、現在の貧弱な産業を如何にして伸ばすか。これについては県自体も真剣にとり組んでおり、そのマスター・プランは、県の阿蘇特定地域開発白書を一読すれば、その方向と意図は明白で、その壮大な気宇と構想には敬服のほかはない。

ただ問題は、この構想をいかにして現実化するかという点にある。われわれ経済人からみれば、いかに雄大な構想も、実現しなければ全く無意味であるので、いま同友会が立案中の構想も、現在まで現実としてあらわれた経済的物理的事実と、この現実を基礎として、直ちに実行にうつし得る問題に限って試案を作成中である。

それは阿蘇の地下水の利用ということである。

阿蘇地方に降った雨は、外輪山に囲まれた広大な地下にぼう大な量として蓄積されている。

現在阿蘇地方で利用されている水は地下十㍍までの水で、これが豊富なものであることは一の宮町の湿田地帯、又は簡単な掘り抜き井戸で湧き出ている水をみても明らかであるが、われわれが利用したいのは地下六十㍍ないし八十㍍の貯水層である。

詳細なデーターは後日発表するが、簡単にいえば阿蘇のゴルフ場（標高約六百㍍）の高さまでは地下六十㍍から八十㍍まで掘れば、豊富な水、清冽で温度の一定した水が阿蘇谷だけで十億トン埋蔵されているという事実である。

地盤降下その他を考慮しても、利用できる水量は年に四千万㌧である。この数字は、県が白書の中で計画している三千百㌶の開墾に必要な水が、阿蘇谷の地下水だけで十分だということになる。

現在のトウキビ畑を水田化すれば反収は四、五倍になる。不毛地をスプリンクラーで畑地化し、湿田を乾田化すれば麦の耕作も可能である。高原ソ菜をねらってのカンヅメ工場の進出も、地下水利用の将来性を示唆するもので、マスの養殖なども、宮崎県の淡水魚指導所の成功からみてきわめて有望である。

清冽で一定温度の水を利用しかも、阿蘇高原の清浄な空気を利用した化学血精研究所の阿蘇進出は、業態としては小規模であるが、その意図はまさしく阿蘇地方の将来の一面を映像化したものといえる。

試験井にも手をつけないで、水がないので牧畜は困難などというのは、甚だ理解に苦む議論で、豊富な地下水を利用して、広大な原野を牧草地化し、酪農のセンターを作ることは決して採算をはなれた問題ではない。

ただこの際お願いしたいのは、地元が目先きの利害関係にとらわれることなく、将来を見通して、温かい受けいれ態勢を整えることである。

娯楽設備に乏しく、学校関係も不十分な土地への工場の進出は、せめて地元の温かい受けいれの気持が進出者にとっては唯一の魅力だからで、いわゆる「ツノをためて牛を殺す」ことがないよう、用心が肝要である。

幸い、阿蘇地方は近年水利組合又は個人で、この地下水への関心がたかまってきた。われわれはこの現実を基礎として、一歩前進の案を作りたいと思っている。

マスター・プランの困難性は、何時どの地点で現実に結びつけるかにある。このためには、県の行政機構、スタッフなども検討する必要があろう。

現実の小プランから出発してピラミッド型に積み立てるのが真実のマスター・プランのような気がするのは、やはりわれわれが商売人であるというせまい視野のセイかな。

＜38・6・15記す＞

（経済同友会開発委員長　九州電力熊本支店長）

ヤマガッコウ

宮川　久子

このあいだ、ある教育雑誌を読んでいたら「ヤマガッコウ」という言葉に出会った。

仙台付近で、学校を怠けてやすむことを「ヤマガッコウする」というのだそうである。

「サボる」とか「ズルやすみをする」とかいう道徳的非難の調子が全然なくて、むしろ、ほほえましいニュアンス、大目に見逃がすというようなおおらかさが感じられるとも説明してあった。

この説明にはまったく同感した。そして小学生時代を思い出した。私が入学した小学校は花岡山の麓の春日小学校で、昔は尋常高等小学校といった。

今はどうなっているか知らないが、そのころは運動場と地つづきに自然の遊び場があったわけだから、休み時間に小高い草っぱらに遊びに行ったまま帰ってこない者がいたり、スケッチの時間に画道具は放り出して、ヘビをいじめたり、野いちごを摘んだり、果てはその時間が済んで帰るときに、一人足りないから探してみると、スヤスヤ昼寝をしている者がいたりすることもあった。これこそ本当のヤマガッコウである。

この言葉はおそらくこうした環境から生れたものであろう。この牧歌的な、土臭い言葉は決して都会の中から生れるはずはないのである。

かって、私が小学校の教師をしていたころ、授業中に突然「キーキキッ」という異様な笑い声がするので、びっくりしてふりむくと、級でもあまりできのよくない一人が、さかんにカブト虫に相撲をとらせて喜んでいるのである。

彼は、はじめはコッソリと机の下で虫を噛み合わせていたらしいのだが、興至って遂に授業時間だということを忘れて、教室とヤマガッコウの区別がなくなってしまったという次第である。

この子は虫のことや魚のことなら何でも知っていた。私が教えることはすこしもおぼえてくれないくせに、綴り方を書かせると「カブトムシとり」とか「エビつり」とかいうものばかり書いた。彼は教師である私に、虫や魚のことを熱心に教えようとすることもあった。私のそれらに対する知識は、彼の前ではあまりに貧弱なものだったのである。

つまり彼は、せせこましい教室の中にきゅうくつに並べられた机の前を解放された世界であるヤマガッコウで、非常に多くの学習をしていたのに相違ない。

（県立図書館奉仕係長）

私の心配

塚本政登士

私たち日本人が平和を念願することは、世界のどの国民にも負けないだろう。

しかし、単に平和を念願するだけで、平和が保たれるものでないことは明らかである。

私は、今日の平和を、これから二十年、三十年、いやもっと永く続かせるためには、最少限つぎの三つのことが必要であると思っている。

それは、国民のすべてが、議会民主々義というものをよく理解し、よりよい政治をもりたてて、権利を主張する反面、義務をまっとうし、民主国家の国民として賢明な行動をとることが第一。

第二は、国の安全と平和を守るために、少々口にはにがくとも〃良薬〃として必要な警察や自衛隊等を、国情にあわせて充実し、訓練して、不幸の事態に備えること。

第三は、世界のすう勢をよく見きわめ、相信ずる友邦と手を結び、相たすけて世界の平和に貢献していくことである…と、信じている。

この三つの条件のいずれを欠いても、平和を失うことになるのではなかろうか。

私たちはこのような問題を、より一層真剣に考え合い、誤解があればこれを解き、国民全部が心をあわせ、力をあわせて日本の平和と安全を守っていきたい。

ところで、ここまで書いたとき、私には更に次のような心配が頭をもたげてくるのである。

というのは、かりにこれから五十年程〃いまの平和〃が、この姿のまま続いたとしたら、日本は〃平和〃のために亡びるのではないかということである。

いま、日本以外のすべての国は、徴兵制を実施し、すべての青年は団体生活を通して、精神的にも肉体的にも鍛錬されている。

身を挺して祖国を守る気迫と何物にも屈しない体力を、日夜厳しい訓練によって養っているのである。生活を楽しみながらも、締るところは締っている。

これにくらべて、わが国の青年の現状はどうか。一部の青年のなかには、いわゆる〃平和〃〃自由〃などのムードに酔って、日夜退廃的な歓楽を追い求め、精神的にも肉体的にも、諸外国の青年に大きく引きはなされつつあるのではなかろうか。

青少年の犯罪、特に兇悪犯もふえている。これをひとくちに「社会が悪いからだ」とか「大人が悪いからだ」などと簡単に片付けるわけにはいかない。

日本は戦後世界水準を抜く驚異的発展をとげたといわれる。

しかしそれは経済面についてだけで、精神面ではかえって退歩しているのではないかと思われる。

もしも、現状のまま二十年、三十年と続いたら、日本人はきっと遊惰の民と化し、まさに、〃平和〃のために亡びてしまうのではないか。

私のこの心配に対し、誰か私の肩をたたき「それは無駄な心配だよ」と、明るい日本の将来を語ってくれる人が現われるまで、私の心配は消えそうにないのである。

（陸上自衛隊第八師団長、陸将）

□　□　□